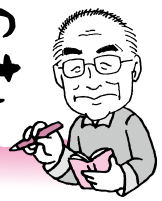
市民リポーター神木新（こうきしん）の

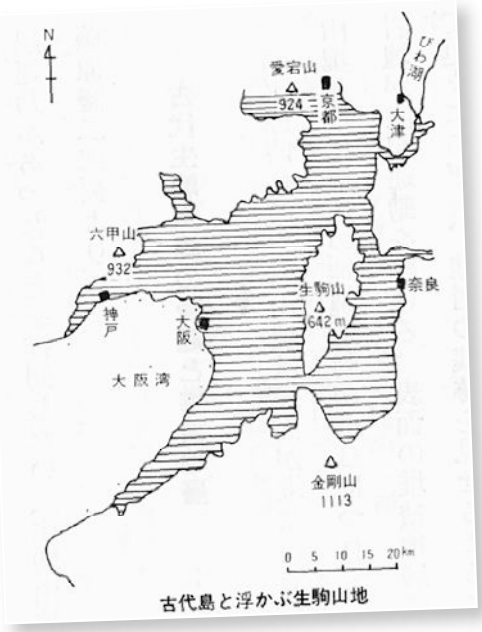
生駒ぶらぶら風まかせ



第36回

古代生駒山

神木新●現役時代は大阪、東京で仕事に明け暮れ、深く見つめることのなかったホームタウン生駒市。時間ができた今、生駒を歩き、出会った人と話すことで、この地の魅力を再発見している市民リポーター。



ラインの入った部分が古代の水域（「生駒市誌」より「古代島と浮かぶ生駒山地」（生駒山地の古地理、藤岡謙二郎））

びっくり!! 生駒山は島だった？

びっくり!!の話です。ずーっと昔の大昔、生駒山は水面にぽっかり浮かんだ島だった。想像もできないことです。でも本当なのです。そんな話を聞いて思わず読んだ生駒市誌にもありました。あなたが住んでいる土地の下、深く深くに貝の化石があるのです。信じられますか？

人間の想像力は、現実の範囲を越えられないとされています。宝山寺の下が波打ち際で、生駒のお百姓さんが舟を出して漁をしている風景。想像できないことであります。信じられないことでありました。

生駒山は「生駒島」だったのです。「地質時代の終わり頃（有史時代前）古大阪湾は現在の京阪神地方の全域に広がり、山麓まで水域が湾入していた。この古大阪湾に浮かぶ菱形の緑の島、それが生駒山である」（市誌概略、以下同）古大阪湾のその地に海底が大爆発しそれが隆起、島になったのが生駒山の始まりなのです。

この事実を知って、高山町の傍示に向かいました。なんで山里の傍示かというと、この話を初めて聞いた場所だったのです。昨年の夏、集落の風情に魅了されて出会った人と話していると「ここは昔、大阪湾やったんやで」と言う人がいたのです。山里で聞いたその話が妙に耳に残り、市誌を読んでみたのです。しかし再度の傍示では「そんな話は聞かんなあ」と言う人がほとんど（大阪湾と教えてくれた人は市誌を読まれていたのか）だが「島」の名残りかと思える小さな事実もありました。

天満神社を清掃中の氏子さんたちの話です。「そういえば、ここはどこを掘っても玉砂利（水流で角が取れた丸い小石）が出てくる」これはこの地域が浜辺か海底だったという証左なのか。「琵琶湖の形が崩れてこの辺まで水がきたということを何かで読んだ」琵琶湖と古大阪湾は繋がっていたという説もあるのです。

島の東側、生駒谷は淡水でした。「淡水産二枚貝」という化石が発掘されています。市誌では、その頃「きれいな湖水か流水があり、山麓にはさざ波が打ち寄せ、貝類や小魚が生息し、青い水面には昆虫や水鳥が群れ美しかっただろう」と60万年前の風景を連想しています。

年代が進み、有史時代になっても生駒谷はまだ湖水で、そこで暮らした人たちが現れました。縄文人です。「岸辺で狩猟生活をした原住民の縄文文化は小平尾遺跡といわれ、萩原からは食器の一部の土器の断片。また菜畑、有里では、矢じりや石器」が発掘されています。鹿や猪、鷹などが獲物だったのです。

そうして始まった生駒の営み。ちょっと気になるのは爆発で隆起した生駒山は火山であり、日本の山はほとんどそうですが、休火山だということです。どうかこのままお眠りください。そうだ、爆発で出来た宝山寺の般若窟に行って手を合わせてこよう。

参考資料●生駒市誌

今回をもって、このコーナーは終わります。理由は「神のお告げ」です。五年もの間、お読みいただいたかたがた、取材に協力して頂いた皆さん、ありがとうございました。

神木 新

【このコーナーが冊子に！】「そうだ、生駒に行こう」「生駒ぶらぶら風まかせ」から、生駒の文化や歴史に関する36回分をまとめたものを冊子（限定900冊、無料）にしました。3月25日㈫から、ふるさとミュージアムで配布します。